

## 宗教と寛容（六）

### —— 宗教の真理と宗教者の態度 ——

小 畑 進（東京基督教大学非常勤講師）

第6章 破邪・顕正の必然性	138
(1) 真理問題の非寛容	138
(2) 正謬の理性と好悪の感情	142
第7章 真理と受領者の関係	144
(1) 一拝領者としての自覚	145
(2) 真理の《立場》と《態度》	148

#### 第6章 破邪・顕正の必然性

さて、また本筋にもどして、先に佛教にも正・邪，正統・異端，内・外という視野はひらけており，キリスト教にも勝・劣，深・浅，完全・不完全，あるいは顕・密と言った視界のあることを縷々述べましたが，私はここで，いわゆる《破邪顕正<sup>はじやくけんしやう</sup>》の理を，むしろ新ためて評価したいのです。

##### (1) 真理問題の非寛容

評論家風の美感・好悪の感情で左右できるようなことはともかくとして，ことはいやしくも《真理問題》ともなれば，正当な意味において，

「破邪」と「顕正」・あるいはその方法論としての「折伏」と「摂受」))とは、当然出てくるはずなのです。このことは、ヨーロッパにおいても、日本においてもそうであり、キリスト教においても佛教においてもまた神道においてもそうだったのです。

それこそ、先にも引用した次の伝教大師最澄の言葉は佛教幾千年にわたる破邪顕正の歴史を喝破しえたものでした。

最澄聞く、南天の龍樹は

最澄聞く、南天の龍樹は八不を織りて邪を破し、東印の馬鳴は一心を立てて道を開く・護法は頌を積して悪取空を断じ、青辨は論を作りて有所得を遮す。天親は論を制して五の過失を洗ひ、堅慧は論を作りて一究竟を顕す。大乘論は則ち無著の顕揚、小乗論は則ち衆賢の顕宗なり。邪を破し正を顕すこと、車に載するに勝へず。是を以て唐朝の法琳は、傳奕を破邪に制し、秦代の僧肇は般若を無知に示す。宝台の上座は佛性論を作り、緇州の慧沼は慧日論を造る。是の如き等の類、歴代繁興す。(95)

龍樹以下、インドの諸佛僧、法琳以下、中国の諸佛僧はみな相次いで破邪顕正によって、佛教の真髓を伝えたとしているのです。これをもし、真理問題において、いたずらなる寛容をもって処したとしたならば、一体どうなったことでしょうか。真理は本来、真理として非真理を許容せざるものであって、排他的なものなのです。真理問題における非寛容ということは、それだけ真理問題が真剣に問われている証左でこそあれ、本質的・本来的には悪ではないのです。寛容・非寛容を通俗的な好悪の感情内にとろかしてしまい、真理の唯一性の主張に内心忸怩たる者は、

(95) 最澄「上顕戒論表」高僧名著全集・伝教大師篇（平凡社）173頁。

その抜けかかった腰を立て直さなければなりません。とかく、謙遜が卑屈に通じ、柔和が懦弱に落ち入るように、真理問題における寛容なるものが、中途半端な曖昧、拒絶を知らぬ怠惰、日和見主義、無関心、持続的な対決の欠除に通じ、個我の自覚の浅薄さを物語るのかも知れないと、警戒しなければなりません。

この際‘寛容’のあり方についての次のアーノルド・J・トインビーの言葉をあげておきましょう。

寛容は純粹に自発的である時にはじめて美德となる。しかしその徳の程度は動機のいかに依存し、そしてその動機はさまざまである。低いもの高いもの、消極的なもの積極的なもの等々、さまざまな動機が存在する。

寛容に対する最も低い消極的動機は、宗教はなんらの実際的重要性をもたず、従ってわれわれの隣人がどんな宗教を信じようと問題ではないという信念である。

これに次いで低い消極的動機は、宗教を妄想であり従ってどの宗教が真理で正しく、どの宗教が虚偽で誤っているかを詮議しても無意味であるという信念である。

さらにこれに次ぐものは、暴力に訴えることは反抗を挑発し、それが攻撃をしかけた者にはねかえってくる恐れがあるという事の認識から生れる慎重論である。こちらの仕掛ける最初の一撃がどれほど大きな効果をあげそうに見えても、みだりに攻撃することによって不倶戴天の敵に仕立ててしまった隣人から、逆に壊滅的な一撃を食う心配がないとはいいきれないのである。

これに次いで低い消極的動機は、宗教上の争いは公衆の迷惑であり容易に社会を危くするものとなるという考えから来るものである。すなわち互に相容れない宗派が自粛して、互に相手を絶滅しようとして平和を破るようなことなく、自ら生き他をも生かせるに如くはないと

いう思想である。

新旧両キリスト教の宗教戦争の弊害に対する反動として西欧世界が宗教的寛容を選んだ時に、西欧人を動かすにあずかって力のあったものは、以上のような消極的な動機であった。そして今日の西欧の経験は、このような消極的な動機であった。そして今日の西欧の経験は、このような消極的動機からする寛容が危険なものであることを教えてつあるのである。<sup>(96)</sup>

とかく、‘寛容’の美德が礼賛されて、逆に真理問題が曖昧あいまいにされる傾向にかんがみれば、‘寛容’でさえあればよいのではないこと、いかなる‘寛容’であるべきか、ということ、をよくよく考慮しなければなりません。

ボン大学のグスターフ・メンシングは、その著「宗教における寛容と真理」の結びにおいて、

素朴な無反省の段階を卒業するだけ成長し、あの客観的歴史的な事態を知った宗教的人間は、宗教の「真理」に関しても、寛容に至るはずであり、そのために自己の宗教的立場を放棄することもない。彼は自己の宗教外の諸宗教の内の宗教的生を認識しなければならないだけでなく、神および浄福に関する異教の言表の「真理」についても、彼が真理を合理的に理解するのではなく、いろいろに現われる聖なるもの永遠なものの充溢したシンボリック一神秘的な諸相として理解する限り、納得しなければならない。<sup>(97)</sup>

(96) Arnold J. Toynbee: An Historian's Approach to Religion 「一歴史家の宗教観」(社会思想社・深瀬基寛訳)トインビー著作集4巻377-379頁。

これにつづいて次のように述べられています。「宗教的寛容の基礎となるべき積極的動機は、宗教上の争いが単なる弊害であるにとどまらず、一つの罪であるという真理を認めることである。それは人間性のうちに野獣性を目覚めしめるがゆえに罪である。宗教的迫害もまた、他人の霊と神とのあいだに立ちふさがり権はないのである。この所論には多々異義がありますが、ともかくも最後の結論には賛成です。

と、きわめて楽観的に「真理」に関する寛容を見ていますが、ヘンリー・カメンの著「寛容思想の系譜」の訳者・成瀬治氏の次の言葉は、私の気持を代弁してくれているように思えます。

十九世紀以来不寛容の牙城のように見られてきたローマ教会は、近時の第二ヴァチカン公会議において、ほとんど革命的ともいえる寛容の態度を宣明し、キリスト教界には今や諸宗派のいちじるしい歩み寄りが、なされつつある。しかしかかる「寛容」の風潮が、一般社会の中における信仰の弛緩<sup>しかん</sup>を表現するものなのかは、まじめに問われてしかるべきであろう。<sup>(98)</sup>

あくまでも真理は真理として、非真理をみとめないものなのであって、真理追究者の側の未熟・偏向・誤謬の可能性の大いさゆえに、また、“寛容”の美德を「何の」・「何における」寛容か、ということをおろそかに、遊離させて称揚するところから、真理の真理たることまでも引きおろすことは、安易にすぎ、真理追究の努力と熱心とを無為に化せしめるというものでしょう。むしろ、真理追究者の態度を、その追及しつつある真理にふさわしいものに純化・聖化してゆくことこそ期さるべきでしょう。

## (2) 正謬の理性と好悪の感情

亀井勝一郎氏は、寛容について次のような一流の注意をなしておられます。

「寛容」とは何であろうか。「寛容」とは無限定の叡知に発した自由精神のことではなかろうか。人間自体の能力としてはむろん不完全な

---

(97) グスターフ・メンシング「宗教における寛容と真理」Gustav Mensching: Toleranz und Wahrheit in der Religion (田中 元訳・理想社) 181頁。

(98) H・カメン「寛容思想の系譜」329頁。

ものだ。「寛容」は「賜はりたる叡知」としての無限定である故に、これを忘れて、人間が自力として「寛容」を行使するとき忽ち危険におちいってしまふ。私はいはゆる佛教的寛容の中に、しばしば「妥協」や「八方美人的態度」をみてきた。キリスト教的「非寛容」の中に、しばしば「独善」や「狂信性」をみてきたやうに。寛容も非寛容も、人間の自力行使としてあらはれるときは、必ずそれぞれの危険も伴ふものである。<sup>(99)</sup>

この最後の文言は、まさに私がこれから述べようとするところを代言してくれているものですが、もう少々、亀井氏の言葉を引用させていただきます。

釈尊は何故蓮華の花を愛されたか。その花の清さと純粹性を愛されたのであらうが、より以上にそれが泥沼から生育してゐる点に心ひかれたのではなからうか。蓮華は泥沼のあらゆる不浄なるものの中に根をおろし、不浄を吸収し、吸収することによって栄養分と化し、その上にあの純粹な花を咲かせてゐる。蓮華の花の純粹性とは、つまり泥沼の不純粹性に対する抵抗能力なのだ。釈尊はおそらくこの抵抗を愛されたのではあるまいか。義である。<sup>(100)</sup>

蓮華の花の純粹性、泥沼の不純性に対する抵抗能力、悪と不浄の中にありながら、それを拒絶する精神。それを忘れたとき、「塩もし効力を失はば、何をもてかこれに塩すべき。後は用なし、外にすてられて人に踏まるのみ」〈マタイ5:13〉となるでしょう。

さて、私たちは、美学的な竹山道雄氏の評言を機縁として、あまりに

(99) 亀井勝一郎著「佛教と人間」現代佛教講座（角川書店）第一巻15頁。

(100) 同上書、16頁。

も大仕掛けな考察をしたかも知れません。鶏を料するに牛刀をもってしたような。しかし、「唯一神論は多神論的共存の世界を排する、共存の寛容をゆるさない、何とみにくいことか…」と言った風な、きわめて感覚的・鑑賞的な美感よりする竹山氏流の——そして日本人一般の——物の見かた・捉えかたに完全に欠除しているもの、すなわち、好悪の感情でなく、正邪・正謬をあらため、究明する理性の立場に立つべきことを語ったつもりです。唯一神論は好かない、多神論の方が、と、おのれの鼻先で左右せず、「はたして神は唯一なりや、それとも多数なりや」と問う学理的な追究、自分の気侷な感情で大事を左右したり、その真理性までも改廃したりするのでなく、まず正邪・正謬を問い、真理なら嫌いでもこれを建て、非真理ならたとえ好きでもこれを建て、非真理ならたとえ好きでもこれを棄捨するという求道者道の必要を語ったつもりです。えてして、真理というものは、土中の宝のように、俗悪な社会では好ましく見えないもので、老子も「笑われざれば、以て道と為すに足らず<sup>(101)</sup>」と語っているとおりなのですから。

## 第7章 真理と受領者の関係

とは言え、終りにあえて、その悪感情の平面に議論をおろして、考えてみたいと思います。そして、いわば《立場》の問題としてではなく、《態度》の問題として、大いに反省してもみたいのです。重ねて申しますが、感情で真理問題は決せられず、感情論は感情論の域に止まるものです。このことはたしかです。そして、この限界を確かめておくとして、感情の問題は、やはり感情の問題としてあるのです。「感情の問題なんぞ…」と放擲<sup>ほうてき</sup>することは、あやまりです。それはそれなりに問題なのであり、むしろ事の真偽よりも、おのれの好悪によって耳目を開閉する

---

(101) 「老子道德経」41章。

人々への真理の伝達・伝道にあたっては、実に大問題なのです。《立場》において正しくとも、《態度》において好ましからざれば、折角の正しい立場は一つも伝えられずに葬り去られる危険があるのです。

### (1) 一拝領者としての自覚

ことは宗教なのです。しかも、殊更に謙遜・謙虚をすすめて、高慢・増長を退けることに、その実践道を投入するキリストの宗教なのです。唯一の真理を所持して正しい立場に確立するばかりでなく、謙虚な正しい態度に立たなければならないのです。英国の歴史家アーノルド・J・トインビーは、一西欧人としての反省をこめて、次のように語っています。

わたしは、歴史的な諸宗教が合体するのを期待する、とはいわないが、しかし、世界のさまざまな文化的・精神的伝統が次第に全人類共通の財産となるにつれて、すべての宗教がそれぞれの歴史的特質を保有しつつも、だんだんに相互間の偏見を捨て去り、(さらに重要なことには)寛大になる、ということは期待できるし、またそうなるように希望したい、と思う。他の信仰に一層の尊敬と称賛と敬愛の念をいただければ、ますますキリスト教を本当に実践しうようになる、とわたしはいいたい。キリスト教の愛の美德を実践することが、われわれ自身のキリスト教信仰の本質的な真理や理想であると信じているものを堅持するさまたげになるというようなことは、とうていありえない。

ここでわれわれは、きわめて重要であるとともに大いに議論をたたかわす余地のある一つの問題点につきあたる。わたしは、われわれ人類の大多数を占めるキリスト教徒でない人びとに対しても、さきに述べたような真理や理想を説きつづけることができるし、またそうすべきである、と思う。「説く」ということは、もっともひろい意味でのそれをさしているのであって、ただたんにことばでキリスト教を解説するだけでではなくて、行動で実際的な例を示すことをもふくんでいる。



過去の事象に照らしてみるならば、人の是認と心服と献身をえるには、つねにことばよりも行動の方がはるかに重要であり、またそれは至極当然である、ということがわかる。一人の殉教者の信仰について幾冊もの本が書かれて、そのなかで非常にすぐれた解説がなされたとしても、その解説の与える効果は、(非論理的と思えるかも知れないが)とうていその殉教者の死そのものが与える効果にはおよばない。われわれがわれわれ自身の宗教の本質的な真理であり教訓であると信じているものを、ことばだけではなくて行為でも表現することができるなら、そしてそれと同時に、他の信仰の真理と理想をも受け入れることができるなら、われわれは、いま以上に、他の信仰を奉ずる人びとの関心と善意をもちえることができるであろう。仮にわれわれがこのような精神でキリスト教を提示するようになりうるとすれば、われわれは、いささかもごう慢と不寛容というキリスト教の伝統的な罪におちいることなく、はっきりした確信をもって、首尾よくキリスト教を提示できそうである。<sup>(102)</sup>

ちなみにトインビーは、クリスチャンの第一の美德として、「悔い改めの謙遜」をあげているのです。

たとえ、「他の者によりては救いを得ることなし、天の下には我らの頼りて救はるべき他の名を、人に賜ひし事なければ」(使徒4:12)との真理を堅持したからと言って、その真理を主張し、伝えるにあたって、高慢になり、おおかたの<sup>ひんしゅく</sup>響響を買うことは、どうなのでしょう。それこそ佛陀の、「かれはみずから自己を真理に達した人であると称しながら、他人を蔑視し、そのように語る」と言う<sup>しんらつ</sup>辛辣な批判もきいてきます。いや、至高の神にましましながら、地上の飼葉桶にくだり、十字架上にお

---

(102) Arnold J. Toynbee: Christianity among the Religions of the World 「現代宗教の課題」(社会思想社・山口光朔訳) トインビー著作集4巻529頁。

のれを捨てられたという謙卑の限りを尽くしたお方の真理を宣べ伝えながら、みずから謙卑の宗教を破ってよいものでしょうか。ともかく、この立場と態度と、二つの関係については多くのことを考えさせられるのですが、さきにあげた亀井氏の所説が私の言おうとしていることの序説のように思われるので、今一度それを読みかえしていただきたく、またその先をもう少し引用させていただきます。

寛容も非寛容も、人間の自力行使としてあらはれるときは、必ずそれぞれの危険を伴ふものである。佛智としての無限定をつねに念願におかなければならない。「念佛」とはさういふことではあるまいか。「よろづのこと、みなもてそらごと、たはごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにおはします…」と親鸞の言葉を再び思ひ出すのである。「念佛」とはむろん称名のみを指すのではない。念ずるところの佛とは、佛の無限定の叡智であり、人間としての自覚として言へば自己放下であり、無心といふことである。佛教だけではない。すべて宗教と人間との関係は危険な関係である。何故ならそれは悉く人間の迷妄にむすびついてゐるからだ。<sup>(103)</sup>

亀井氏は、「寛容とは無限定の叡智に発した自由精神のこと」であり、「人間自体の能力としてはむろん不完全なもの」であり、寛容も非寛容も「人間の自力行使としてあらはれるときは、必ずそれぞれの危険を伴ふ」ものであると明察しておられます。

そうです。私たちは、寛容や非寛容を、自分の能力として、自力的に行使するとき、八方美人に墮したり、傲慢独善にふくれあがったりするでしょう。亀井氏の言われる「無限定の叡智」を、「神」と明言して、私たちは、この唯一の救いの福音を神から、受領・拝領した者であること、

---

(103) 亀井勝一郎著「佛教と人間」15-16頁。

その真理は、ひたすらに神より発したものであって、自分より発したのではないこと、神の所有であって、私たちはただ受託したものであること。自分はただ一介の被造物として、多くの人々の中の一人として、それをいただいた者。たまたま、御あわれみによって少々先に受けさせていただいた者であるということ、を、真実に、徹底的に自覚することではありませんか。ここに《立場》と《態度》と二つの間に巻き起こる暗雲は払われるのではありませんか。亀井氏は、キリスト教的「非寛容」の中に、しばしば「独善」や、「狂信性」をみてきたと言われていますが、私たちは、謙虚にこの批評の前にさらされましょう。キリスト教そのものは、いかなる気取勝手な評者にも、「独善」とか「狂信性」とかとして、とられるべきものではなかったはずなのです。それが、そうとられるところに、実は現実のキリスト教「徒」たちの責任が指さされているのです。真理に立つことはよい。真理には立たねばならぬ。しかし、自分が真理なのではない。真理をいただいたものでしかない。一管理者の分際なのである。このことをわきまえて、人々に伝えなければならない。俗に言う《エリート意識》なるものは、全く無用のことなのです。はたして、世のキリスト教徒たちは、今日の佛教徒たちが、その宗祖によって抱かれていたほどの確たる真理意識なく、漫然と習慣に流れているようなことはないとしても、逆に、だからと言って、その目ざめた真理意識をもって、おのれが“真理”そのもの、“神”ともなって、あたかも「虎の威を借る狐」の二の舞いを演ずることありとしたら、無念なことです。いわゆる「天に代りて不義を討つ」という思い上がった態度は、おのれが多くの人々の中の一人として、啓示をいただいた一人の者であるとの福音的・恩恵的自覚の薄いところから噴き出るのではないのでしょうか。

## (2) 真理の《立場》と《態度》

キリストの真理・十字架による救いの福音、それは、一切の謙遜の美德を含んでいるはずのものであり、これを、もし思い上がった態度で説

くとしたら、それはキリストの福音を説いて、実はキリストの福音を踏みにじっていることと、断罪されなければならないのではありませんか。ここに《真理に立つ立場》と《真理を伝える態度》とをわけ、《真理そのもの》と《真理を伝える者》とをわけて、真理そのものに対する、真理の受けかたと、伝えかたとが問われなければならないのです。道元の、

しるべし、佛家には、教の殊劣<sup>しゆれち</sup>を討論することなく、法の浅深<sup>せんじん</sup>をえらばず、たゞし修行の真偽<sup>しむぐみ</sup>をしるべし注<sup>(104)</sup>

という言葉も<sup>じだ</sup>耳朶<sup>じだ</sup>によみがえってきます。私たちは、教の殊劣・法の浅深を、あくまでも追究し、獲得します。しかし、折角得た、いや実は授与された殊にすぐれて謙虚を大黒柱とするキリストの教法・福音をみずから体现せず、証示しないならば、それこそ道元の「たゞし修行の真偽をしるべし」の一言ですべては瓦壊してしまうことでしょう。

あの、有史以来初めて、キリスト教徒としてアテネの地を踏んだパウロは、その知恵の都アテネの町が、偶像群で飾り立てられているのを見るや、真理を愛するものとして、心に憤りを感じました〈使徒17:16〉。

(104) 「正法眼蔵・弁道話」日本思想体系（岩波書店）13，17－18頁。

また次の内村鑑三の所論も、本質と効果との取り違えがありますが、参考までに。

「真の宗教家は名を以て争はない、佛教と言ふ者必しも基督教の敵ではない、信仰の対象物をキリストに取るも阿弥陀佛に取るも各人の自由である、要は其管む内的生命の确实旺盛ならんことである、其の実に世に勝つ<sup>まこと</sup>の能力たらんことである、内に充実して真の満足を生さしめんことである、若し佛教にして斯かる生命を起さしむるに足るならば佛教素より可なりである、神道にして其宗教的使命を果たすに足るならば神道素より可なりである、宗教の事に於ては此世の<sup>これ</sup>すべての事に於けるが如く、問題は実力問題である、内的生命を起こし得る乎、盛んに之を維持し得る乎、靈魂を活かし得る乎、悲痛と患難と人生に臨むすべての憂苦を慰めて猶ほ餘りある乎、宗教の優劣は斬かる問題に対して与へらるゝ、實際的解答如何に由て定めらるるのである（内村鑑三全集（岩波書店）第11巻98頁）。

しかしだからと言って、また彼が「アテネの人たち。あらゆる点から見て、私はあなたがたを宗教心にあつい方々だと見ております。私が道を通りながら、あなたがたの拝むものをよく見ているうちに、『知られない神に。』と刻まれた祭壇があるのを見つけました。そこで、あなたがたが知らずに拝んでいるものを、教えましょう」〈使徒17:22,23〉と語りかけたとき、パウロは、アテネの市民たちに、高慢な思い上り者、みにくく人を見下す態度と思われるような、<sup>いたけだか</sup>威丈高な、いわゆる異教徒征伐的な態度であったでしょうか。いや、精読してみると、高慢で人を見下す態度は、むしろ、「このおしゃべりは、何を言うつもりなのか」〈17:18〉と語ったアテネの市民。パウロが死者の復活のことを語るのを聞くと、「ある者はあざ笑い」、あるいは、「このことについては、またいつか聞くことにしよう」〈17:32〉と冷笑したアテネの市民たちのものだったのではありませんか。使徒パウロは、たとえば、何とも真剣な学生のような態度で語っていたのではありませんか。彼は、ついに市民の嘲笑・冷笑の間を、くぐり抜けるようにして、立ち去って行ったのです〈17:33〉。

そもそも、彼が使徒として福音の宣教の任にあたるべく召された事を、いかに有り難いこととしていたかは、まず復活の主が自分に現われたことをもって、

最後に、月足らずで生まれた者と同様な私にも、現われてくださいました。私は使徒の中でも最も小さい者であって、使徒と呼ばれる価値のない者です〈第一コリント15:8,9〉

と、へりくだって平伏し、

私は、神の力の働きにより、自分に与えられた神の恵みの賜物によって、この福音に仕える者とされました。すべての聖徒たちのうちで一番小さな私に、この恵みが与えられたのは〈エペソ3:7,8〉

として、それがひたすらに、神の一方的な恵みの賜物であると、自覚してのことだったのであり、なканずく、彼が愛弟子に書き送った次の痛切なる告白文は、キリスト教徒の心情を遺憾なく結晶させたものとして千古不磨の大文字です。

私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。私たちの主の、恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに、ますます満ちあふれるようになりました。

「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に來られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。

しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださったからです。

どうか、世々の王、すなわち、滅びることなく、目に見えない唯一の神に、誉れと栄えとが世々限りなくありますように。

アーメン〈第一テモテ1:13~17〉

人は、これを見て、法然が黒谷の経蔵に善導の「観経疏」をひらき、その一角に念佛往生の一句を発見して落涙千行し<sup>(105)</sup>、さらにこの法然上人に際会した親鸞が、「たゞ念佛して弥陀にたすけられまゐらすべし<sup>(106)</sup>」との言葉に接して開眼し、「善人だに往生す、まして悪人は<sup>(107)</sup>」と喝破しえたことをも思い合わされるでしょうが、パウロは、自分のような最

(105) 「和語燈録」卷第五「諸人伝説の詞二」・昭和新纂「浄土宗聖典」175-176頁。

(106) 「歎異鈔」三。(島地篇「真宗聖典」175-176頁)。

(107) 同上

悪の者が、救われるばかりか、福音宣教の特権をも与えられるという憐れみをいただいたのは、実に、自分を最低として、自分より上のすべての人々もまた救をいただき、福音の証人として立たしめられることの見本であると自覚した点、しかも、おのれの救の喜びや感謝に止まらず、ついに祖師がたをも越えて、“神”の栄光の“頌栄”に昇華しているのであって、「俺が、俺が」と言った自己主張や、エリート意識など、神の栄光の中にかき消えてしまっているのです。

そして、ここにもう一人の使徒ペテロを参照しましょう。かつて若き日は人一倍、思い上り多く、剣をふるっては敵の耳を斬り落とすこともあったシモン・ペテロ。その彼の晩年(AD. 64-5)における老熟した次の言葉の深沈重厚な態度は、いかがなものでしょうか。

むしろ、心の中でキリストを主としてあがめなさい。そして、あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしていなさい。

ただし、優しく、<sup>やさ</sup>慎み恐れて、また、正しい良心をもって弁明しなさい。そうすればキリストにあるあなたがたの正しい生き方をののしる人たちが、あなたがたをそしったことで恥じ入るでしょう。

もし、神のみこころなら、善を行なって苦しみを受けるのが、悪を行なって苦しみを受けるよりよいのです(第一ペテロ3:15~17)。

まず口先で、ではなく、「心の中で」キリストを主としてあがめよ。あなたがたのうちにある「希望」について説明を求められるように、福音の希望を体現しているように。弁明するにしても、「<sup>やさ</sup>優しく」、「<sup>やさ</sup>慎み恐れて」、また「正しい良心」をもってせよ。あなたがたが他の異教徒をののしるのではなくて、あなたがたがののしられ・そしられるのであって、それをあなたがたの態度が、彼らをして「恥じ入る」にいたらしめるほ

どであれ。「神のみこころなら」、善を行なって苦しみを受けよう、と。あの粗暴なりしシモンは、かくも名実ともに苔むす巨岩のごときペテロとは成っていたのです。

これは、さきのパウロの次の言葉とも共鳴します。

愚かで、無知な思弁を避けなさい。それが争いのもとであることは、あなたが知っているとおりで。主のしもべが争ってはいけません。むしろ、すべての人に優しくし、よく教え、よく忍び、反対する人たちを柔和な心で訓戒しなさい。もしかすると、神は彼らに悔い改めの心を与えて真理を悟らせ、一時は悪魔に捕えられてその思うままになっていた人々でも、目ざめて、そのわなをのがれることができるでしょう（第二テモテ2:23～26）。

大伝道者の、何とつつましい態度でしょうか。しかし、パウロはさておいて、元漁師・ペテロにかえりますが、彼がかつては外に眺め、信じ、宣教のテーマとしていたキリストは、いつしか彼の生活の内においてけんけんふくよう拳々服膺される模範となっていたのです。

善を行なっていて苦しみを受け、それを耐え忍ぶとしたら、それは、神に喜ばれることです。あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのため苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました（第一ペテロ2:21～24）。

この「ののしり返さず」とか、「おどすことをせず」とか、「正しくさ



ばかれる方にお任せになりました」とか言った言葉は、一語一語、福音を証しする者の態度を示しているものと言うべく、

それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。語る人があれば、神のことばにふさわしく語り、奉仕する人があれば、神が豊かに備えてくださる力によって、それにふさわしく奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。栄光と支配が世々限りなくキリストにありますように。アーメン〈第一ペテロ4:10.11〉

にいたっては、正に、福音の真理を宣べ伝える者は、それが「神のことばにふさわしく」語られるように、すべてのことにおいて、自分がむくつけく誇りたかぶるのではなくして、ただ「イエス・キリストを通して神があがめられる」ことが期されねばならないのであり、ここでも、究極は、頌栄とアーメンの世界に昇華しているのを見るのです。

この心がまえ、神という「無限定の叡智」者のもとに、おのれを福音の一拝領者とわきまえ、最劣等・最悪党の自分が、最勝・唯一の真理を宣べ伝えさせていただくという態度の中に、真理の立場における不寛容と、真理を伝える者としての態度における寛容との緊張を安定させることができるのではないのでしょうか。終りに、主イエス・キリストの言葉をあげて結びとしたいと思います。

汝ら心うちの中に塩たもを保ち、かつ互やわらに和やわらぐべし〈マルコ9:50〉

終。